

# セミナー日記

一月一日(金) ハイソリツヒ神父の開会礼拝でセミナーが始まった。「これから三日間どうなるか……」。参加者の意気込みと不安が伝わってくるようである。オリエンテーションを受け、地図をたよりに地域を回ってもらったあと、セミナー各物シスター・エリザベスの手料理(献立は、パエリア、お豆腐に、サラダ)で会食。思わぬごちそうに一同くつろいだひとときであった。夜は、越冬のストライドと金井先生の話で、「釜ヶ崎」を大まかにとらえた。ディスカッションをし、ゆっくりする間もなく、夜間医療パトロールに関する諸注意を聞いて、最初のパトロールへ出発。青カン者 二五二人。

一月二日(土) フィールドワークでは、炊き出し、医療券(診察依頼券)発行、病院訪問など越冬の働きに三々四人に分れて関わってもらう。とにかく短い期間で限られたプログラムであるが、参加者の方から組合(労働組合)会(日本キリスト教団)、ふる里の家(カト

の人たちに話しかけたり、労働者のおちゃりんと話をするなど、積極的に関わってくれたのはうれしかった。三時から、ケースワーカー入佐さんから結核についての話を聞く。釜ヶ崎での医療、結核の現状のきびしさを知るとともに、問題に地道にかかわる中で、釜ヶ崎でも結核は治ることを知らされた。夜は横浜寿より渡辺さん(映画八生きるVの監督)を迎え、寿の記録映画八生きるVを労働者の人たちと「子どもの里」でともに観ることができた(約百名参加)。「労働者はいつも説明され、解釈される側なので、この映画では、解説をあまり入れませんでした……」との渡辺さんの言葉が印象的だった。セミナーでは二回目、そして最後のパトロール。パトロール後の話し合いでは、パトロールの意義、シノギ(路上強盗)などが問題として出された。

一月三日(日) 日曜日ということで、西成教

の経験を大切にすることで、未長くいろいろな型で釜ヶ崎と関ってほしいと思う。さて、これで全プログラムは終わったのですが、問題は感想文。これがなかなか書けないようで、感想文のためにもう一泊した人が、三々四人いたようだ。……ごくろうさま。

第七回釜ヶ崎越冬セミナー参加者は、男子十人、女子四人の計十四人。学生は五人で、あとの九人は、いわゆる社会人。



## 1981年度第7回

# 釜ヶ崎越冬セミナー だより

去る12月12日の越冬セミナー委員会よりプログラムを下記のとおり通りお送りした。お知り合いの皆様。(尚、1月2日のプログラムについては、多少の変更もあり得ます。)

- ・テーマ 「釜ヶ崎の医療(特に結核)」
- ・日時 1982年1月1日(金)午後2時(集合・受付)～1月3日(日)午後3時半(解散)
- ・会場 「喜望の家」 大阪市西成区萩茶屋2-8-18 TEL 06-647-3946  
(通電) 国鉄環状線 新今宮駅下車。徒歩15分。池田線 御堂筋線 新今宮駅下車。徒歩5分。(詳しくは下記地図参照のこと)

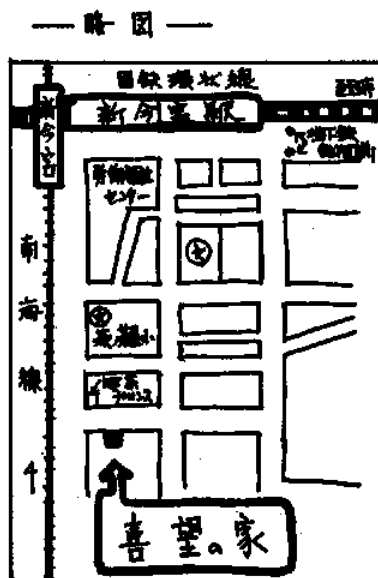
プログラム	午前	午後(1)	午後(2)	夜間
1月1日		2:00 受付 開会礼拝(14:40) ディスカッション (会費) 会食	7:00 スライド(前) 釜ヶ崎医療の現状と 越冬セミナーについて (会費)	9:30 パトロール 10:00 ディスカッション パトロール
1月2日	← フィールドワーク (国鉄環状線、池田線、御堂筋線) ・結核の全体的問題と 結核と個人(入居)		7:00 映画「生きろ」上映	9:30 パトロール 3:00 話し合い
1月3日	礼拝	1:00 会食 2:00 話し合い 9:30 解散		

- ・感想文 帰宅後3日以内。3日間の感想。お送り先は越冬活動12月12日の提案。おとせ 800字～1,000字程度を目安にしてください。
- ・会費 1月1日当日の受付にてお支払い下さい。3,000円です。また、万が一お断りされた場合は必ず委員会宛に事前にお知らせください。
- ・食費 会食以外は各自外で自由にお支払いください。
- ・持参品 洗面用具、作業用服装、夜間のパトロールの際に防寒対策服装(防寒、防寒、防寒対策)等。筆記用具等。
- ・お問合せ

喜望の家 越冬委員会(面上社)  
TEL 06-647-3946

1981年12月12日

越冬セミナー委員会 発行





## 感想 セミナーに 参加して

驚きと興味か  
薄れた時こそ

釜ヶ崎を考えることは、私には  
広く人間を考えることでもあると  
思いました。それからセミナーの  
三日間のうち、釜ヶ崎を自分の足  
で歩くことが出来ましたが、次第  
に自分とこの距離感及び異和感に  
変化が生じてきたと思います。良  
い悪いは別として、青カンする人  
々や路上を歩く人々の姿への異和

(堀 剛)

### 釜ヶ崎の暖かみ

「釜ヶ崎の暖かみを持って帰っ  
てほしい。と同時に、釜ヶ崎も少  
し暖かくして帰ってほしい」  
セミナーの初めに言われたこの

言葉を繰り返し自らに問う―釜  
ヶ崎の暖かみ―。

一月二日、昼の炊き出しの最中  
であった。公園のくすぶる焚木の  
前で、男の人が黒っぽい体でうず  
くまっていた。まもなく白衣を着  
た二人がやって来てその人を担架  
にのせて救急車へと運んでいった。  
「あのおじさんは、どこが悪いん  
ですか」「……もう寿命や」。一  
瞬どういう意味だろうかと思った。  
さっきまでそこで寝ていたはずの  
人が、今はもう死んでしまってい  
るといのか。目の前で、人の命  
が事もなげに消えていった。私の  
隣に立って言葉をつまらせながら  
そう教えてくれたのはMさん―  
釜ヶ崎で同じように日雇労働をし  
ながら、他の仲間たちのため毎日  
炊き出しを続ける「釜ヶ崎炊き出  
しの会」のメンバーのひとりであ  
る。

「寿命や」と静かにMさんが語  
った時、「なんぼ食うてもええや  
んか」と炊き出しの人たちが怒鳴  
った時、そこには担架で運ばれて  
いった人への、はしを持って行列  
を作っている人たちへの共感があ  
った。無表情の言葉の中に、すご  
い血相の奥に言いようのない優し  
さを感じた。

「生きる」という題名の映画を  
労働者のおじさん達と肩を並べて  
見た時のことを思い出す。有名な  
大資本をもつ大企業の底辺で危険  
な重労働を人知れず担っている人

(山路咲子)

### あるギャップを感じた

何人かの方々と夜遅くまで話す  
機会があったことは有意義でした  
が、越冬実の人が、徹夜で警備し  
ている時にこんなことをしてい  
いのかとも考えました。釜日労の  
人とキリスト教越冬実とのギャッ  
プのようなものを感覚的に感じま  
した。

あくまで労働者主体にとのキリ  
スト教越冬実の姿勢は大切と思  
いますが、それにしても労働者自身  
の考えをもっと知ることも必要で  
はないでしょうか。その意味で僕

(横山 潤)

ここにのせた参加者の感想  
文は、「第七回釜ヶ崎越冬セ  
ミナー報告書」からの引用で  
す。紙面の関係上、全員のし  
かも全文を引用できません  
でしたが、参加者の感じたもの  
を汲みとっていただければう  
れしいです。

炊き出しの会は、朝九時、昼十  
二時、夜七時の三回、公園へ出か  
ける。「ようけ食べて力つけてや  
」とおおきに。おかゆを手渡しな  
がら小さな会話がかわされる。あ  
るとき給仕をしていたYさんが順  
番を待つ行列に向って叫んだ。  
「なんや、おまえ三度目やないか  
と。この言葉が終わらないうちに  
残りの会の何人かが、その何倍も

### 非人間的なこと

(宮本潤子)

「生きる」という題名の映画を  
労働者のおじさん達と肩を並べて  
見た時のことを思い出す。有名な  
大資本をもつ大企業の底辺で危険  
な重労働を人知れず担っている人

## 結核と労働とアルコール

結核患者の病院訪問を通し、その背後にある労働歴やアルコール問題の重要性を知らされる。

病院訪問をしていろいろなことに気づかされる。

昭和三十年代、四十年代にかけての経済成長期に、石炭から石油へとエネルギーの転換がおこり炭鉱になって失職した人が仕事を求めて都市にやってきた。私が訪問している中にも四人の炭鉱労働者がいる。中には二十年近く炭鉱で働き、塵肺患者として労災だと認定されている人もいるが、三十年も前の炭鉱後を見つけないことができず、また確認してくれる人もどこに居るかわからず、認定されない人もいる。

農村においても、そこで生活できなくなった人が、出稼ぎという形で都市へ仕事を求めて出てきている。

港湾労働、ダム建設、地下鉄工事、万博、公共事業、原発、等、日雇労働者は、最も危険な場で過酷な労働を強いられる。その時々時代の揺れ、政策がまともに反映されているのである。

SさんもTさんもAさんも、日雇いあるいは下請労働者として働かざるを得なかった背景を背負っていると推測される。Sさんは、船

底での高温の中での重労働が原因であり、Tさんは、高温、粉塵の中での長時間労働が結核を悪化させた原因だと思われる。Aさんのいう不節制、アルコールとの関係も忘れてはならないだろう。

Sさんから話を聞いていた時、隣のベッドに寝ているKさんが、「結核になるなんて夢にも思わないもんな。いつなったか、どういう原因でか、非常にわかりにくい病気やなあ」と呟いた。それだけ精神的な面も合わせて、複雑な要因が絡んで徐々に身体を蝕んでいくのであろう。一人一人の患者に出会っていると、世の中の底辺で精一杯働いて生きてきたことをかすかな誇りとしてはいるが、使えないものにならなくなった今、捨てられて、十分な保護も受けられない、という資本の側の論理に押し潰されていることに憤りを感じる。

一つに病院の問題も大きい。病院は患者に対し、絶対的な権限をもって日々の痛楚させられる。病院の問題をあげると、一つには貧しい食事がある。病院側の人が食べてみればよく分ると思うのだが。そして、必要以上の薬（だと思おうとしか言えないが）を毎食後飲ませる。文句でも言おうものなら強制退院も覚悟しなければならぬ。これらは、患者の身体を退院どころかますます衰弱させている。それだけ病気の根が深いのであろうか？ このような病院の体質に不安を感じトッコする人もいる。当然であろう。しかし、トッコしても行路病死への一途を辿るか、他のケオチ病院に入院するかどっちかなのだ。

「仕方ない」、「ここはまだまし」とあきらめてしまわず、患者どうしのつながりが深まり、力ができてくれば、と願っている。

殺されていっている人をじっと立ちすくんで見つめているだけの自分自身をはがゆく感じている。

### Sさんの場合

Sさん（五十七歳）は、十三歳の時に東京にある印刷会社に奉公に出された。一カ月のうち休日第一火曜と第三日曜のみであり、その日には二十五銭の小使い銭（給料）をもらい、映画を見たり、奉公先の子どもの面倒をみていた。奉公してようやく五年がたとうとしていた頃、一度家に帰り父親に奉公先の待遇について話した。父親はそれ以後、その印刷屋でSさんを働かせようとはしなかった。奉公先からはもどってくるよう頼まれたが、父親は断っていた。その後、奉公先の主人が父親の所へ来た折に、百円札を渡して帰っていった。

十七歳の時、自宅の近くに航空会社があり、そこで働くことになった。朝七時半から夕九時までの十四時間半労働だった。一分の遅刻も許されなかった。当時、父親は喘息で働けず後妻に来た母親と弟の生活がSさんの肩にかかっていた。航空会社で働き始め一カ月がすぎようとした頃、会社から無断欠勤を理由に解雇された。女性の働き手が多勢いるということだった。

その後、とにかく働く場を求めていた。どこでもよかった。そんな時に知ったのが船乗り（三井船舶）だった。外国へ行き、父親においしい物を食べさせてあげたい、その思いだけで、東南アジアを中心に航海する船舶の機関係になり、船底で石炭をくべる仕事をしていた。当時十八歳だった。

二十八歳の時、三井船舶のかりつけの医者から、健康診断を受けた時、「肺が少し曇っている。結核だ」と言われた。「結核だと

言われてもどんな病気がよく分らなかった」とSさんは言う。とにかく、二カ月程休みをもらい薬も飲まずにブラブラしていた。そのうち人手不足だということで、再び機関士にもどった。

二十九歳の時、三井船舶からイヌイ船舶に移り働いていた折、見合いをし結婚することになった。責任者に結婚のため二週間程休みたいと申し出た所、法律上は認められていたにもかかわらず、許可がおりなかった。そこで、「こんな所はやめてやる」と口論し、それ以来船から降りてしまった。結核だといわれても力があり、若かった。

そのうち、神戸で沖仲仕をやるようになった。仕事をやり始めた頃は、最もきつい仕事回ってくる。それに嫌気がさして一年でやめてしまった。大阪へ行けば仕事があると誰からともなく聞き、大阪へ向った。そして、大阪駅で手配師にひっかかり、「三軒屋」にある半タコ飯場に送りこまれた。あちこちの飯場を回った。横浜にも五年いた。よく仕事をしたので、親方からもかわいがられた。そのうち、同じ飯場で働いていた仲間を通して釜ヶ崎を知ることがあった。いつか、はつきり覚えてないが、一度嗜血したことがあった。そして、四十五歳の時、痔が悪くA病院に送られ受診した結果、結核だということでB病院に送られた。一年半入院生活を続けたが、働けると思い完治しないまま退院してしまっ。その後、S病院に入院した。当初は衰弱もひどかったが二、三カ月するうちにみるみる肥えてきた。一年程してS病院を飛び出した後、すぐに飯場に入り働いた。

四十九歳の時、再び衰弱し、市更相からM病院へ行き、その後B病院に転院し、六年前からB病院で療養を続けている。（Dの記録）

## Tさんの場合

Tさん(四十四歳)は中学卒業後、生まれ故郷である青森で木材の伐採、運搬などの仕事をした。数年後、北海道へ行き、飯場に入り働いた。水路工事をしている時、十メートル上から転落し、四日間意識不明の状態が続いたこともあった。背骨、頭部を強く打ったが幸い一命はとりとめたという。

二十歳頃、東京に出て来た。ここでも飯場に入り働いた。地下鉄工事などを行った。当時は充分な機械もなく大変な仕事だったという。それでも肋骨を三本折るという事故に遭った。入院中、医者から肺に少し腫があるといわれた。その時は気にもとめずじまつた。

その後、名古屋の飯場で数年働き、そのうち大阪へ来て、中山工務店の資材置場で常雇いで働き始めた。五年間ここで働いた。その後、大阪製鋼でここでも常雇いで働いた。鉄を溶かしている所で働くのだから室温が五〇度以上あり、粉塵が飛び散っていた。一週間もすると鼻の上に五センチもの塵がたまっていた。その中でマスクもなく働いていた。また、昼夜一週間交代で働き、かなり無理していた。二年半働いた後、また飯場で働き始めた。Mダムの工事などに行っていた。

四十歳頃、足首がむくみ、Y病院に半年入院した。退院後、飯場を転々とした。

京都の飯場にいた頃のことである。入院する一カ月前、寝汗はかくし、階段を登ったら息切れが始めた。変だとは思っていた。

四十三歳の時、医療センターで受診し、結核だといわれ、市更相

着いて歯の治療に励む。

五月八日 Aさん自身の過去の生活を話す。一九六〇年頃まで炭鉱の事務関係の仕事をしていたが、その頃マージャンをおぼえ、毎夜重ねているうちに仕事を休みがちになり、退職してしまつた。釜に来て、日雇労働をする。マージャンと酒はやめられない。自分では、「アルコール中毒患者」とは思わないという。病気になる前は不節制が原因だ。弟は、ある会社を経営。金には不自由しないで、時々無心に行く。その都度、「兄貴来るな」と断られるが、母親からいくらからもらう。

五月十六日 朝七時三十分。ドアベルがなる。Aさんが酒気をおびて立っている。電話連絡して帰院させるため電車の切符を買って行かせた。後で、病院事務長より「酒気をおびている者をなぜ送ったか」とことがあった。昼過ぎ、本人病院から帰って来た。「もう絶対にB病院には行かない。私は精神病院に行きたくない」と自己退院した。

五月十六日 今日から青カン生活を余儀なくされる。

五月二十八日 市更相に入院を頼むが、「五日間、酒を飲まないで来るなら」との条件で、この間ひろい(廃品回収)をして生活。なんとか頑張れ。

六月二日 Aさん、市更相の窓口の人々(職員たち)の無愛相と不確かさにいらだちを強く感じている。

六月十二日 C病院への入院の知らせと病院への道順を書いた葉書きが届く。

六月十五日 C病院訪問。少し落着いている。「かなりやせた」と手首をにぎる。「五十歳を越えた今、これまでの自分の生き方を

からB病院に入院した。

去年の秋、軽快退院したが、しばらく働いたのがよくなかったの

であろう、今年の二月に再入院し、療養を続けている。(Dの記録)

## Aさんの場合

一九八〇年二月初め頃、寒そうに肩をすぼめ「入院したい」と相談に来られた。

形式的な書類に名前、生年月日を書き込む彼の手はふるえていた。診察を終え、市立更生相談所(市更相)を通して入院が決まった。「結核でした」と本人からの知らせがあった。後B病院訪問を通じてAさん(五十五歳)との関わりが始まった。

二月二十九日 Aさんが私たちの家(愛徳姉妹会修道院)に来る。酒を飲んでいいる。「下着、タオル、石鹸がほしい」と言う。依頼心の強い人だと感じた。病院から一時間もかけて来られた。

三月十三日 来訪。酒気あり。「飯を食わせろ」と大声で叫ぶ。

三月十五日 「病院に帰るので二百円交通費として借してほしい。」これをことわる。酒を飲むような気がした。

三月二十日 病院訪問。Aさんはベットの上。やれやれ安心ノ

四月二十日 昨夜ひどく酔って来ていたので入院しているかどうか心配。訪問すると昨日の件があり、食欲なし。

四月二十一日 「外出届を出して来たが、帰りが遅れてしまったので、電話で問い合わせしてほしい」とのこと。結果、帰院してよろしい。十二時頃、無事帰院の知らせあり。

四月二十四日 飲酒が激しいため一ヶ月外出禁止。その期間に落

見るとつらい。生きる目的、価値観、希望と言った確かさが欲しいと言う。

七月四日 また酒を飲んだようだ。「訪問に来るな。俺はお前たちに哀みをかけられたくない。定期的に来るのは重苦しい」これはメシ代だと言って私に千円渡した。

七月十日 赦しを願った手紙が来る。その後も飲酒、無断外出の繰り返しを重ねている。

八月二十日頃 自己退院。

九月十五日 「十日間、飯場に行ってきた。四万円預ってほしい。持っている全部飲んでしまうから」とさし出す。

九月十六日 昨日預けたお金を全部持って行く。「飲もうと何をしようか勝手だ」と叫ぶ。その後、酒と仕事の繰り返しが続く。

一九八一年の越冬の頃、「胸が悪い。息切れがきつい。働けない」と言って二、三度、私たちの家を訪問。一九八一年四月、再び市更相を通してY病院に入院、現在に至る。

三回目の結核による入院。前回にくらべてかなり落着いている。でも飲酒によるトラブルで強制退院寸前までいく。Aさんの代弁をして何んとか難をくぐり抜け入院生活を続けてもらう。

最近自分は、「アルコール中毒患者」であることを認めるようになる。「こんなことをしては駄目になる。この年で気付くのは遅いけど、これからは無茶も出来ない。オフクロにも安心して死んでもらいたい」と年老いた母親のことを話してくれた。

同室の人々も「Aさんは酒をやめたらしい」と感心している。今も読書で退屈することなく治療に励んでいる。

(シスター・Oの記録)

# いよいよいよいよ!

## E・ストローム

この際、日本におりますのは、もうすぐ三十年になります。半生です。しかし、何を言いたければ、先ず言葉を探さなくちゃあ……それはどういうことでしょうか。

やっぱり、「外人」だ、外人だからでしょう。外人だから、考え方はちがいますし、外人だからあくまでも言葉のハンディキャップもあります。それは確かそうです。そこまでは日本の方が理解して下さる、許して下さいでしょう。ありがとうございます。

わたくし自身は、もう一つのちがうことを感じます。キリスト信者、宣教師です。「福音を伝道する」のがわたくしの勤めです。しかし一般の日本の方が宗教を否定する、だから、「福音を伝道する」時には、言葉を探さなくちゃあ……。

固定して、決まった言葉は、「教理」になるかもしれません。「福音」ではありません。(わたくしとしては)。

しかし、今、ここで、「福音」について文章を書くつもりではありません。「この十八

年に金ヶ崎におりました時に何をしましたか」という題をあたらされた。それであれば、材料がたくさんあるから、言葉を探さなくてもいいでしょう、と……。

イア……やっぱり、考えたい、探したい。福音を伝道したい。

休職をしながらこういう「絵」が浮び上がりました。旧約聖書の物語なんですが、アブラハムの僕がその主人さんの息子のためにお嫁さんをもろうために長い旅をし、遠い国まで行くことが必要になりました。(詳細のこととはここでいいたくありませんが、面白い物語だから、読みたいならば、創世記二四章から) わたくしとしては金ヶ崎という街は「遠い街」でした。夢の中にもそういう街を見たことはありません。大阪へ来たのはけっして自分の意志によって自分の道を歩んだことではありません。わたくしの上にもある主人さんの意志がありました。「わたくしは主のはためです。」(それはまた聖書の言葉です)では、大阪へ来ました時に、外の質問があ

りました。今の質問は、「金ヶ崎で十八年に何をしましたか」、あの時の質問は、「金ヶ崎で何をやりたいですか」と……。「何をやりたいですか」というのは、あの時に自分でわからなかった。「何が必要ですか、何をすべきですか」と聞かれたならば返事ができました。「そうだ、そうだ今覚えています。あの時に、「金ヶ崎でするべきことは……」という案を書きました。それは立派な物でした。内容は次のようです。一：保育園、二：学童保育、三：母の会、四：青年のグループ、五：大人の教育、六：ボランティア活動、七：労働者の問題、八：キリスト教の社会福祉学。そのぐらいでしたと思います。やり方としては、全部一遍でなくて、一つの仕事ができるまでは、三、五年かかりますから、二十年の計画でした。それから、地域も違いますが、一軒の家でなくて、あちらこちら地域の中心に四軒、五軒の家の計画でした。

あの時にこの計画を見た人たちが何も言わずにただわらいました。「二十年さきのことなど日本人が考えられないんです。一軒の家でなければ、経済的に不可能」などの。あの時とあの批判にたいしては何も言うことができませんでした。困った。苦労した。「天に坐るわたくしの主人さんが笑った。」(聖書の言葉)と、自分の好きな通りでなりました。今日は四、五軒だけでなくて、八軒があります。わたくし一人ではなくて、教え切れないほ

どの人がこの地域の福祉この地域の人たちの人権を考えたりそれを実現するために働いています。わたくしの教会だけでなくて、地域の中はオイクメネ的になりまして、教会に関係がない人も多勢参加します。只今、この文章を書きながら、もう一つのあの時の批判を思い出しました。

「この地域にただ一人が入ったら、いけません、先ずグループをつくりなさい。一人で何もできません。」

それがわからないわけではありません。ただ、グループをつくる暇がなかった。それから、グループをつくろうと思っても、一人一人やめて、減るのではないかとの恐れがある。一人で行くならば、減るよりも殖える可能性が多い。それはあの時に半分冗談でした。しかし、あの時の冗談は預言になりました。現実になり、実際です。

まだまだするべき仕事がたくさんあります。福音はまだ福祉になっていません。一般社会や行政、経済界は金ヶ崎の人権はまだだ認めていません。教会は、金ヶ崎の人権がどれほど踏みじられていくかわかっているでしょうか。わかっているならば、どうして何もやらないか。この世の中に神様が何のために教会をつくったかな？と時々思います。教会が立ち上がらないならば、神様が自分でつくった教会とけんかするか、そのしらん顔をする教会をほっておいて、ちがう人と共に

働いているかどちらかなと時々思います。わたくしの時代はここではほとんどおわりです。遠い国へ行った旅はこれでおわり。アブラハムの僕の物語にもどります。かれが何を言いましたか、「主はこの旅を祝福して下さいました。」(聖書の言葉)

それだけです。わたくしは何をやりましたかというよりも神様はどうなさいましたかというより考えてほしいです。金ヶ崎に行われている仕事はただ人間の働きではありません。ただ一人のへんな外人、一人の女のアイデアではありませぬ。

### ●本の紹介

#### 「神様が笑った」

とストローム先生

「神様が笑った」を読みながらストローム先生の笑顔を思い出しました。わたしは、金ヶ崎で先生と共に仕事をすることができて約一年になります。本音と建前でもってなんとなく人と関わってきたわたしにとって、ストローム先生との一日は、飾り言葉やポーズをはぎ取られ裸にされるような経験でした。とにかくわたしにとっては、「怖い」「きびしい」存在です。先生は、先生の笑顔などより

おこった顔を見るのが多いのですが、うれしい時に子供のようになまに笑われるストローム先生の顔はとても印象的です。わたしたちの日常生活の中では笑いたくても笑えない状況は決して少なくありません。まして真剣に生きようとすればするほど自己嫌悪、批判を受けねばなりません。そんな人間を見て天に在っている者は笑っている(聖書)と思うとむしろ腹立たしくさえなってきます。しかし、この本を読み、ストローム先生のあの笑顔を思い出して見ると、神様が笑った時にわたしは人間もほんとの意味で笑えるのではないかと

と想います。福井先生とストローム先生の頑固で真剣な生き方を高い所で神様が見られて、ニッコリはほえまれたのか、ゲラゲラお腹をかかえておられるのか想像もつかないのですが、心から喜んでおられることには違いありません。ですからストローム先生、福井先生を知っている人も知らない人も、神様を知っている人も知らない人も、一人でも多くの人に読んでいただきたいと思っております。(福井達雨、E・ストローム「神様が笑った」柏樹社刊・一五〇〇円 喜望の家・西上真澄)



記録映画  
1981・寿トヤ街

# 生きる

横浜・寿町は日雇労働者の町である 一日の生活を、1日契約の労働に賭ける

## ●監督の弁

### 世界が揺らぐ時 渡辺孝明

人間は、本当に狭い世界を通過しない限り、広い世界に旅立ってゆけない——。

誰かが誰かに語りかけると、それが、遠くの土地であるうと、身近な場所であろうと、話しを、人間の足と体で運んでゆかなければならない。足で考え、頭で歩まねばならない。

人間が、自己の観念の中で、幻の人々に語りかけようとしたところから、他者を、自己の背丈で切り取って語る「解釈」が始まったように思う。

寿町は、日雇労働者の街であり、何よりも「人間」が住む街です。約四千五百人の単身の男達、約三百人の女性達、そして約百八十人の子供達が生活している。日雇労働者、何の身分保証もなく、日々雇用で生きる人々。絶対に、全体ではくくりきれない、貴重でかけがえのない数千の人生が確かに息づく。

そして、そのような人々の生き様を飲み込んで厳然として在る寿の町。

今日までの長い時間、日雇労働者、そして寿町に生きる全ての人々は、常に他人の言葉で語られ解釈されて来た。様々な解釈され、誤解され、耐え続けてきた。善意にしろ悪意にしろ、自己の思いの中で、他者を解釈してゆくのはたやすい。しかし、と思う。本当に語らなければならぬのは誰なのか。本当に、人間に対して苦しみも、喜びもドロドロに溶け合わせて語らねばならない人々こそ、誤解や社会的偏見にさいなまれながら、一日一日を確かに労働し生きていく「寿」の人々なのだ。

寿町に生きる一人一人の人生が、この国の、この時代の矛盾を突き破ってゆかなければならない。一人一人の人々が、一人一人の、耐え難く重

い人生を、血を吐くような言葉で語り始める時、本当に世界はゆらぐのだと思います。

私達、わずか二名の撮影スタッフは、この一年前、言葉を失なってゆく日々の連続でした。言葉などで語れない「何か」を、じっと感じ続けながら寿町の人々によって生かしてもらった。人が語る、その事を運ぶ。人が働く、その事を運びたい。そう思い続ける日々の中で、私達は「生きる」を、映画として創ることをあきらめた。寿町に生きる人々の人生に、私達はもう自分勝手な言葉を語る事は出来ない。だから、映画のどの場面にも、ナレーションの一言も使うことができなかった。

寿町の、早朝から夜までの間に、船内労働と、四名の人々の戦後生活史が語られるばかりである。しかし、そのわずか四名のかけがえのない凄絶な自分史にしても、きっと、四名の人々のほんとうに一部の人生でしかないのだと思うとき、私達は胸が熱くなる。

語られず消えてゆく無数の人間の思い。この思いを、この世界に、はっきりと存在するのだと寿町の人々の肉声をもって伝えたい。

「生きる」とは、本当に死ぬ日まで、生きとおす緊張なのだと思う。理解するのでは

## 「生きる」をみて

村田由夫

写真、映像とは恐ろしいものだ。日頃触れあっている人々が語っている……苦であるのに、どうしてこども感じが違うのだろうか。犯しがたい厳しさが漂っている。アツと息をのみ、日頃の自分の触れ合いの自身を思っちぢみあがってしまう。人の触れ合いの奥底には、こんなすさまじさが存在しているのだろうか。誰であれ、どんな人であれ、その人の「生」の重みと厳しさには、外側からの解釈では

なく、寿町に生きる様々な人々の人生を感じてほしい。

映画「生きる」は、撮影させていただいた人々と、映画を見て下さる人々が、スクリーンを通して付き合っていたく映画なのだと思う。

迫ることができないのである。感ずることしかない。

頭を働かせ解釈することなしには何事もはじまらないよとかの社会状況下において、この映画は「眼力」を要求しているようだ。

解釈をやめよ、頭を働かせな、感じなさいと。

人に人生がある。しかし人生を失いながら社会的地位や金にすがり、それが自分の人間の力、評価と思いを違えている人々の群市民社会。

寿地区には、肉体労働を通して、また寿に来るまでの人生の遍歴の中で、何か、浄化されるものがあるのだろうか。ここには自分を飾るものはないが人生がある。

「生きる」という題の映像に、明るいきとあったものすら流れていると感じたものだった。

映像とは恐ろしいものだ。

(寿福祉センター)

。製作からのお願い  
「生きる」の上映に協力して下さるよう、心からお願い申し上げます。

連絡先  
横浜市中央区寿町4-18-1  
寿福祉センター 気付／横浜  
ドキュメント・フィルム／  
電話(〇四五) 六四一〇  
二八〇／夜間(〇四五) 六  
八一―八七二二

# いかに仕事が減ってきているか



## 不況

○求職の群れに鳩の悲しき眼  
 ○求人欄に冷たき歳の壁  
 ○日雇のメルヘン今朝も血でえがく  
 ○すすけたる行者のごとき仲間ふえ  
 ○ひもじきは心に集くうドブねずみ  
 (谷口富男「センターだより」第56号 一九八二年六月十日より)

四月に入って、「とにかく仕事がない」という労働者の切実な声をひんばんに聞くようになった。げんに六月十一日(金曜・晴れ)に「あいりん総合センター」内の寄せ場に早朝(五時十五分から六時まで)行ってみると、求人マイクロボスは一台もなく、トビ職一名を求人している乗用車が一台あっただけだった。去年の十一月末から十二月初めにかけて三回ほど行ったときには、求人マイクロボスは四十台から五十台はあったように記憶している。ことしの二月中旬ごろに行ったときには百台あまりあったはずだ。

まず、今回の越冬が聞かれた去年の十二月からことしの二月までの求人状態を、西成労働福祉センター紹介課「業務報告書」によってみてみよう。

56年12月度 「建設業界の不景気など、不安材料が多かった年末であったが、

12月度の日雇求人紹介は、ほぼ11月度の状態を保ち、前月比七・五%の増となり、前年同月比三・六%の減にとどまった。建設業の占める割合は八八%と依然として高い。運輸・製造とも、前年同月比減少しており、全般的に地区日雇労働需要は、低迷の中に推移している。期間雇用関係の求人は思ったより持続し、ほぼ昨年なみ、中旬まで求人があり、窓口紹介実数は、前年同月比一一%の増となった」

57年1月度

「例年1月度は梅雨期とやらんで日雇労働需要の大きく落ちこむ月となっている。特に年始の建設業の求人の出足は遅く、戎さ(10日)を過ぎてから動き出すことが多い。建設業の占める割合は依然として高く総数の八五%となっている。今年の1月は公共投資抑制や、住宅不況のさ中とあって、その落ち込みは昨年引き続き大きく、前月比四四%の減となった。昨年同月比では六%の減にとどまっている。しかし今年、全体の景気の動向を反映して運輸・製造業で前年比可成りの減少となっている」

57年2月度

「1月度に大きく落ちこんだ地区日雇労働需要も、2月度に入ると年度末が近づいたこともあって、次第に回復をみせ、ほぼ昨年なみとなった。建設業の占める割合は、前月の八五%から八九%へと高まっており、年度内工事完成へ向けての労働力の集中が始まっていることを示している。しかし好況の一昨年に比較する

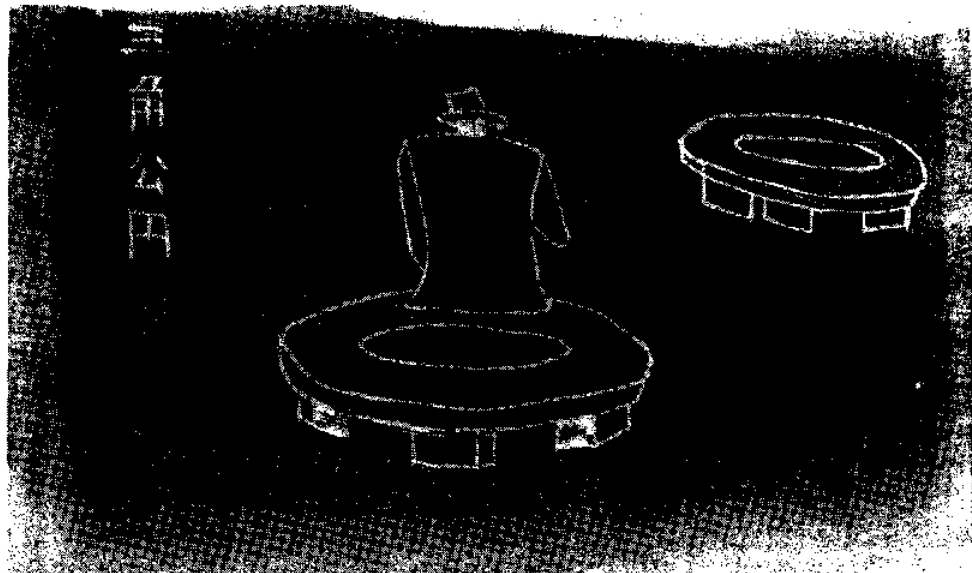
と、地区日雇労働需要は三五%もの減少となっており、建設業の最近の景気の動向を反映したものとなっている。期間雇用関係の窓口紹介は、現金求人伸び悩みの中で労働者の関心を集め、増加を続けており、前年比一六%増となった」

五十六年十二月、五十七年一月とそれぞれ前年同月比減であること、ほぼ前年同月比なみとなった五十七年二月でも五十五年二月に比べると三五%もの減少となっていることが注目される。そして三月四月五月となるや、求人状況はさらに厳しくなる。

同じく前掲「業務報告書」によると、三月は前年同月比一八・九%減であり、四月は一二%減である。この四月度の現金求人人数(四〇、八九九名)は、ここ六年間の最低であるという。五月はこれよりさらに減り、前月比一六・二%減の三四、二五六名という。(ちなみに、石油危機による不況が釜ヶ崎をおおっていた五十年四月が二四、五四七名だった。)

以上みてきたことをより明瞭にするために、西成労働福祉センター無料職業紹介所提供の四八年度別・産業別日雇就労あっせん状況(昭和57年度月別日雇現金求人就業状況)を掲げておく。

ところで、このように仕事が減ってきている原因としては、先の「業務報告書」にも指摘されているように、公共投資の抑制と民間の住宅投資の不振が考えられる。なかでも、公共投資に関しては、五十六年度の西日本地域の公共工事受注高が四兆四千九百三億円で前年度比一・一%増の微増にとどまったと報じられている。(「毎日新聞」57年4月11日)現政府の最大の課題が「行政改革」の遂行にあることを考えると、現在の釜ヶ崎の「とにかく仕事がない」状況もすぐに改善されると思えない。しかし、こういったところで現実には仕事をし、メシを喰わねばならない具体的な個々の労働者にとってはなにといったことにはならないだろう。とにかくなんとかしなければならぬのだ。





病院は、それこそ釜ヶ崎労働者を食いの

持ちはどんなものだろうか。

医者にとっては、「天国行政」かも知れない。

阪和病院は、通称「釜病棟」と言われるように、釜ヶ崎の労働者の医療、しかも生活保護（医療扶助）の労働者の医療機関として大きなり、いまや三つの総合病院をもち約二千のベットがある近畿一の大病院になった。

阪和病院は、医師不足、看護婦不足の中で医療活動を続けてきたのだから、釜ヶ崎の労働者も普通だったら助かるものが、阪和病院に入院したばかりに助からなかったり、治らなかつた例も沢山あったことは想像にかたくなかった。しかし、これだけ「デタラメ」を働いても行政機関は、医療活動を禁止することができない。みすみす生命の不安を感じつつ入院しなければならぬ、釜ヶ崎の労働者の気持ちはどんなものだろうか。

府衛生部もまた国立病院も黙認あるいは助長するのに一役買ったのである。また警察は、結核予防法には「保安処分」的なものはないのかと、抵抗する結核患者を警察力でねじふせようとすると一場面さえあった。これでは治る結核も悪くなっても良くなるはずがない。

六月二日の「読売新聞」（大阪版）にこんな見出しで、医療法人錦秀会阪和病院のことが報道された。

にして大きくなって来たのだが、その裏には脱税のあったことが明るみに出た。脱税事件で理事長は、顧問弁護士と交代した。これで一安心かと思ったら今度は、看護婦の定員不足を看護婦免許証のコピーを買って員数を合せたり、医師不足を一枚七万円の医師免許証コピーで保健所等の医務監査の目をごまかして来たことが指摘された。

地獄行政は、阪和病院に終らない。今年五月、長居病院が医療地獄を地で行くふるまいを見せた。結核指定医療機関の長居病院は、その病棟の老朽化を理由に閉鎖を患者に通告してきた。閉鎖の三週間前である。患者が不安を訴えても一切無視し、ただ閉鎖を強行するために強制転院を拒否する患者たちを軟禁状態にいたり、無理矢理車にのせて転院のために診察をうけさせたりした。あるいは、金をにぎらせ、口封じをしたりして、結果として病院におれなくさせ、追い出すというこ

医師免許コピーを買った阪和病院

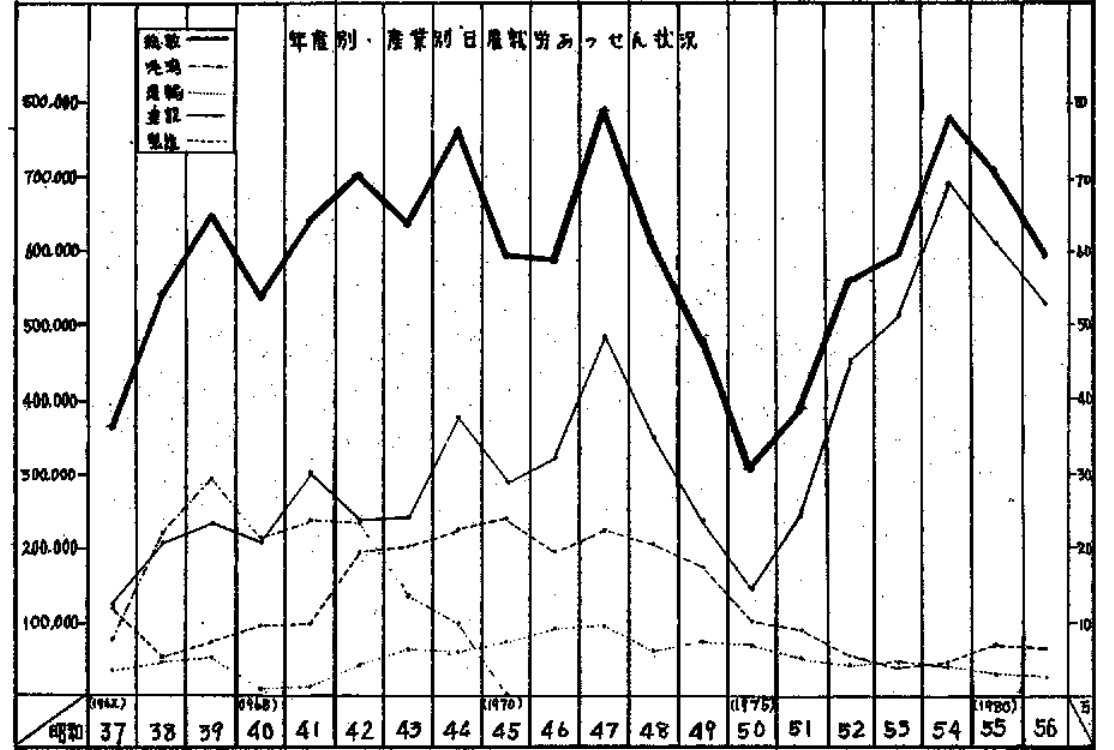
# でたらめな医療機関

釜ヶ崎近況 ● 一九八二年六月 ②

結核患者を追い出す長居病院

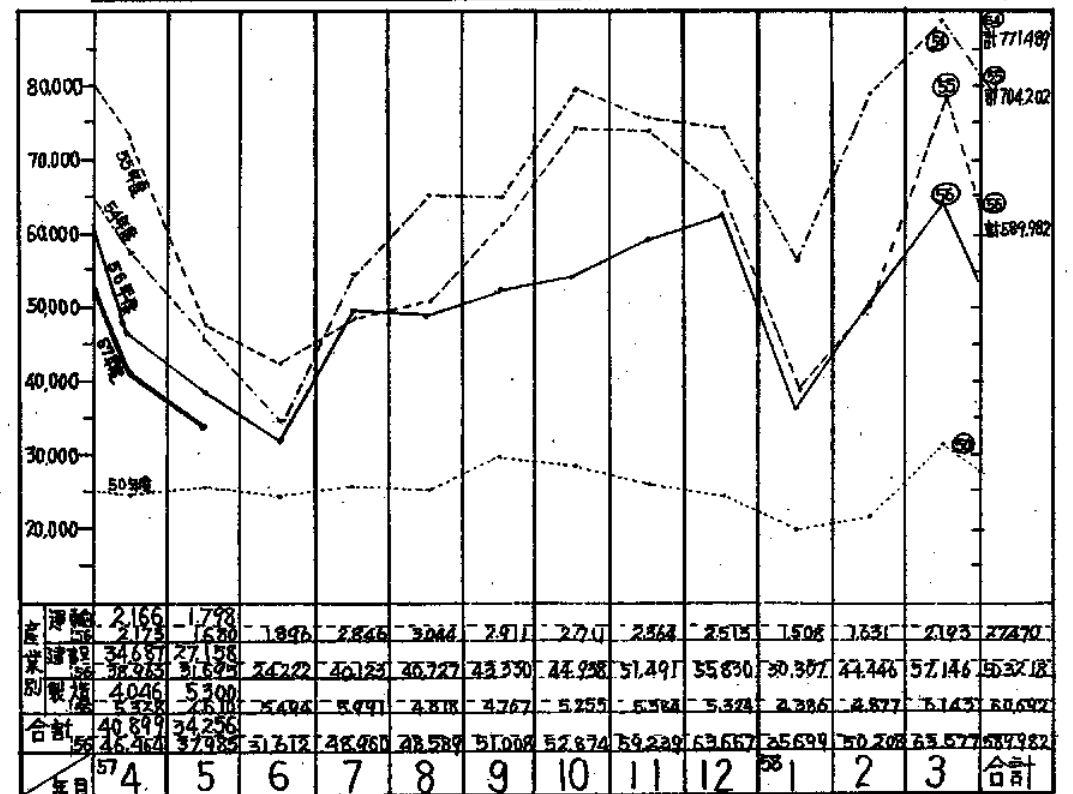
いが、労働者にとってまさに「地獄行政」と言わねばならない。

(図-1)



(註) 大阪府労働センター 資料提供  
石川労働センター 資料提供

昭和57年度 月別日雇現金求人 就労状況









編集後記

「土方(どかた)殺すに、刃物はいらぬ 雨の三日もふればよい」

釜ヶ崎にとって雨はコワイものですから、梅雨の季節は名実ともにうっとうしいときです。ところが今年はずいぶん雨配。本来ならありがたいことなのでしょうが、それでもなさそうです。「仕事」がほとんど少ないのですから、晴天でもうっとうしい連日の気配です。

炊き出しに長い行列ができ、ついに公園から行列がはみ出しているこの頃です。あのオイル・ショック以上のきびしさとか。この先どうなるのだろうか、重苦しい気分がただよいます。

乾いた状況にうるおいをもたらす「雨」はなんとかならないものでしょうか。人の力を合わせてなんとかできるものは、それこそ、

できる限りの力をつくさねばと思えます。(JM)

確約書

私儀 此の度不行届の為非常に迷惑を掛け申し訳けなく、今後再度注意をし度く、今の度の件、何とぞ御許し願ひ度、御願申します。

敬具

昭和五拾七年六月式拾八日

これは、昨日一人の労働者よりもらったものです。この人との出会いから起こった今日までの出来事を振り返りつつ、一つの試された時代が終り、新しく関係が生まれる予感がして、心からうれしく思いました。いつも、一人の自分を自分の思いで断っていたことを知らされ、恥しく感じています。Nさん、ありがとうございます。そしてこれからもよろしく願ひします。

(D)

報告書の読後感はいかがですか。いままでと少し変わっているな、とお感じいただければ、編集者一同のねらいはまず成功したと言えましょう。今回は、キリスト教が何をしたかと言うより、労働者自身はどう闘ったか、どんな問題に直面しているかを少しでも伝えようと努力いたしました。仕事の状況、曜日の状況を書いたのもそのためです。

また、カット類は、毎週水曜日夜七時から喜望の家で開かれていた「創造広場」に集る労働者自身の手によるものです。マンガは第十二回越冬闘争実行委員会が発行した新聞「日刊えっとう」から転載させていただきました。紙面が許すならさらにいくつか紹介したかったのですが、残念です。

機会があったら是非、横浜寿町の渡辺さんたちが作った映画「生きる」もみてください。

連絡先は、映画を紹介した85ページにありま。

ストロームさんが定年でドイツに帰られ、またハインリッヒ神父が一年の休暇で帰国中でさびしいですが、ルカ神父や薄田神父が新しく就任されたり、スペインからシスターコラルが帰って来られ、またちがった雰囲気の中で委員会(キリスト教医療連絡会)を土曜日の夜もっています。四月からは、カトリックの施設「旅路の里」も新しく仲間入りしました。

越冬後の釜ヶ崎近況は、「釜ヶ崎通信」でお伝えします。創刊号が出て、これから第二号の編集に送りかかるところです。希望者にお送りいたします。ご連絡ください。今回の編集には友人Eさんの協力がありました。感謝。

例年この報告書が出来る頃は、釜ヶ崎の夏のゼミナールが始まる時です。全国から十四名の男女が「旅路の里」を会場にし、学びの時を持ちます。新しい釜ヶ崎との出会いの一時でもあります。(Q)

● 第12回釜ヶ崎越冬闘争支援報告書  
「釜ヶ崎 1981年冬」

- 発行日 1982年8月1日
- 発行所 大阪市西成区萩ノ茶屋2-8-18  
喜望の家気付 Tel 06-647-8946
- 編集 キリスト教釜ヶ崎越冬委員会  
「釜ヶ崎1981年冬」編集委員会
- 印刷 木村桂文社
- 頒価 800円



# '81冬中間報告

(Iさんへの手紙)

## キリスト教釜ヶ崎越冬委員会

代表 重野信之

(釜ヶ崎協友会・関西キリスト教都市産業問題協議会)

大阪市西成区萩之茶屋二一八—十八

連絡と 希望の家内  
カンパの キリスト教釜ヶ崎越冬委員会

送り先 電話 大阪(〇六)六四七—三九四六

郵便振替口座 大阪 五〇三八五

### 変わったのは公園だけ

Iさん  
お元気で過ごされたことと存じます。Iさんが、釜ヶ崎を尋ねられたのは、一九七七年の一月でしたからもう五年前ですね。一般に五年もたてば地域も大きく変わると想像されるのが普通ですが、ここ釜ヶ崎は、五年前とほとんど変わっておりません。あえて変化を求めれば、少しきれいなドヤが何軒か建ったことでしょうか。それと、三角公園を除く公園には、金網の柵がはりめぐらされ、あちこちに「檻」が出来たという印象をもちます。とくに一九七五年に越冬に使われた花園公園には、三メートルほどの金網の柵がつくられ、さらにご丁寧なことに有刺鉄線がはられ、入口は施錠されるという新しい型の公園が出来ました。

西成警察裏の萩の茶屋中公園通称四角公園では、労働者の組織「炊き出しの会」の手で、昨年の十二月一日以来、朝九時、昼一時、夜七時の三回の炊き出しが続けられています。この炊き出しも不況を反映して毎回百人以上が列をつくります。とくに十二月下旬には一日の合計が四百人、五百人という日がありました。この炊き出しに並ぶ人数は、釜ヶ崎の「不況のパロメーター」のようなものです。不況で仕事にアブレる。したがって止むをえず青カン(野宿)し、炊き出しに頼るということでご存知とは思いますが、怠けていて炊き出しに頼り、外で寝ているのではありません。その証拠に十二月初旬、仕事があったときには、炊き出しに並ぶ人も一回せいぜい三〇、四〇人で、一日の合計が一、二、三〇人から一五〇人という日が続いています。

わたしたちの委員会は、ここ二、三年医療に重点をおいて活動が続けてきましたが、労働者の病気も仕事と深い関係にあります。ある日突然、病気になるのではなく、それは日々の労働による疲労など、つまり労働条件も大きく作用しています。朝四時、五時に起きて就労するわけですから、日雇労働は決して気楽な稼業ではありません。それに、朝早く起きたと言ってもそれが、就労の保障ではありません。昨年の五・六月頃は、前夜から就労のため路上でバスを待ち、高齢のためはねられたという人の話も聞きました。加えて、不十分な食生活、あるいは結核などの既症があれば、高齢に近づくに従って再発していきます。また、仕事にアブレ、青カンすることも病気になるがります。そして、たまたま入院できたとしても不十分なしかも差別的な医療に抗議して病院を飛び出し、再度、青カンして病気が重くなる場合もあります。

今年の越冬に対するわたしたちキリスト教グループの活動は、前にさしあげた「訴え」である程度理解していただけたと思

ますので、労働者自身の越冬の取り組み、それに対するわたしたちのこれまでの支援の様子をお知らせし、さらなるご支援をIさんや友人たちにもお願いするところです。

越冬は今年で十二回目です。今年の特徴は、わたしたち同様「医療」を大きな柱とするともに労働問題である「飯場闘争」が二本目の柱です。労働者は、今年一月に入ってから、労働者の人権や生活を無視した飯場に対して抗議行動を続けています。一月に入ってから既に二度、京都府下の美山町や兵庫県尼崎に出かけています。不況につけ込んで、雇い入れた労働者に対して暴力を加えておどしたり、あるいは賃金未払いで追いかえしたりしています。それに対して泣き寝入りすることは、ますます日雇労働者の労働条件を悪化させることであるとの理由から労働者は立ちあがっています。労働者からの労働相談の内容などを聞きますと信じられない事が起っています。飯場以外のところで酒を飲んだといって暴力を加えて放り出したり、労災の補償金を手配師が横どり、一〇〇日以上も飯場で働いたのに賃金は、その半分も支払わないという飯場。あるいは飯場内でリンチ事件が起きて労働者が殺されるといったことさえ起きています。こんなことが、釜ヶ崎をはじめとする日本各地の寄せ場で日雇労働者だからと言って許されるものではありません。このような一つ一つの事件に対して、労働者は力を合せて解決していくことも、この冬の大きな課題としていきますし、またいくつかの成果も勝ちとっています。

医療では、結核対策などを行政が責任をもって実施するように昨年十二月初めに大阪市や西成保健所に話にいったのですが、交渉に行った労働者代表やキリスト教関係者に対しては、門前払いです。「あなたたちと話すする必要はない。あなたたちに文句を言われる筋合いはない」と

言うのです。だったら充分なことがなされているかと言えばそうではありません。一九八〇年の越冬報告書にも紹介されていますように、結核で入院の相談に行ったら労働者がごとわれ、二日後地下鉄入口で倒れているのを発見され、入院後すぐ死亡するといった事件が起きているのです。労働者の人権と生活に深い関心を寄せるわたしたちはこのような医療行政を決して監視することはできません。

大阪市民生局が年末に実施する臨時宿泊所対策でも同じです。嚴重な面接をへたうで約二〇〇人の労働者が大阪南港の吹



きさらしの埋め立て地に建てられたプレハブなどに入所しますが、このプレハブ宿泊所の周囲はこれまた有刺鉄線できまされ、ガードマンや警察官が見張っているというものです。まさに、「釜ヶ崎強制収容所」です。こんな状態ですから、あえて青カンを感じて飛び出す労働者も決して少なくありません。労働者の人権などはじめから保障されていないのです。

あるいは、釜ヶ崎の労働者のための福祉事務所である大阪市立更生相談所では、障害を持った労働者が、働けないからなんとか生活保護を適用してほしいと相談に行ったのですが断られて、路上で倒れ救急車で入院するというものも起きています。こんな出来事を日常茶飯に経験しますと、「福祉とは何か」と考え込んでしまいます。しかし、労働者は、このような医療行政、民生行政に対しても労働問題同様根気よく闘っています。

#### 不眠不休の労働者

釜ヶ崎の労働者は、それこそこのような労働、医療、民生の状況を打破するため越冬中はまさに不眠不休で闘いました。青カンする労働者のためには、社会医療センターの軒下をかり、布団を敷き仮眠の場をつくりました。そこへしのごし（西成路上強盗）が来ないように徹夜で見張番をします。また早朝から医療相談や労働相談をします。連日情報宣伝の新聞も発行しました。また別のグループは、炊き出しを懸命に続けました。そして十二月二五日から一月一五日までは、毎夜十時から地域内の医療パトロールをしては、ケガ人、病人などに対する対策をおこなって来ました。

わたしたちキリスト教の支援グループは、不十分ではありませんが、この活動を側面から援助してきました。もっと一緒に出来たらと思いますが、人手が足りなかつたり不訓れであつたりして、支援が時には足手まといになることもありつきました。しかし、わたしたちの呼びかけに応じて、大阪近辺をはじめ関西各地、さらに年末年始には、関東地方からも沢山の方々が応援にかけつけてくださいました。これは、やはり大変な難いことでした。

Iさん、あなたも支援に来たとき、キリスト教の活動からも学ぶところが多々あつたが、それ以上のことを四・五日一緒に活動した労働者から学んだと言っていましたね。今冬参加された方々も同じ思いだと想像しています。

#### 青カンとテレビカメラと

ここに、今冬はじめて釜ヶ崎の越冬を経験された東京の学生の感想がありますので、その一部を読んでください。初めての人にうつった釜ヶ崎が描き出されています。

\* \* \*

今回、はじめて釜ヶ崎越冬に参加して私は様々な現状を知らされました。それによって考えさせられたことを書きます。

まず、驚かされたことは、釜ヶ崎の町全体にテレビカメラが備え付けられ、二四時間人々が監視されていることです。何故人間が人間をしばりつけて、自由を奪うようなことをするのだらう。テレビカメラを取り付けることそれ自体が人権を無視することではないだらうか。

テレビカメラが常時取り付けられているような状況がつづく限り釜ヶ崎にある種々な問題は



解決できないと思います。

それから、もう一つ印象的なのは夜間パトロールの体験でした。ここでまず驚かされたことは医療センター前で青カンをしている人々の多いことです。二百人程の人々が吹きさらしの中でふとんにくるまわっているという状態、これは常識では考えられないことだと思いました。そして、さらに路上では百人程の人々が野宿をしているというのを知られた時、ショックを受けました。どうして彼らがこのような状況に置かれなければならないのだろうか、それを作り出しているのは誰だろうかというのを考えた時、それを作り出したのは人間であるという答えがかえってくる。そして自分もその人間の一人であるということに気づかされました。（後略）

この感想を読んで、わたしもはじめて釜ヶ崎の青カンの群れに出会ったときを思い出しそのときの経験を大切にしようと思っています。

#### 午前一時のパトロール

さて、労働者が主体の夜間医療パトロールは去る一月一五日で終りましたが、まだまだ寒さが続いているので、これから二月末日までわたしたちが中心になってパトロールをしようと思ってきました。これは、昨年のパトロールに対する反省もあります。昨年一月末でパトロールが終了しましたが、その後寒波が来て、何人かの労働者が路上で亡くなるという不幸な出来事がありました。できたら、最低限のことだけでも防ぎたいという気持ちからの出発です。午前一時から約一時間半ぐらい釜ヶ崎地域をパトロールし、死者だけは出さないように努力しようと言ふことです。

一月一五日までに悲しいことですが、救急車で入院した後病院で亡くなった人が既に二人もいます。釜ヶ崎とは遠くはなれた地ではありませんが、どうか釜ヶ崎労働者のことを祈りのうちに憶えてください。

最後になってしまいました。今年も支援のカンパ有難うございました。目標（七〇〇万円）に徐々に近づきつつあります。いまは五九〇万円です。あと一歩です。友人としてあつかましくお願いのアピールを再度いたします。

では、お礼と近況報告まで、みなさんにもよろしくお伝え下さい。さようなら

一九八二年一月二五日

### 釜ヶ崎日録

一九八二年十一月  
一九八二年一月

11月7日 一九八一年度 越冬委員会が結成される。  
今年も結核の問題を中心に取り組むことを決めた。  
12月1日 炊き出しの会は、今日から2月末まで、炊き出し一日三食を支給する。  
12月7日 保健所・環境保健局へ要望書を持っていく。  
保健所の態度は高圧的であり、要望書すら受け取らない。環境局は、要望書に目を通し、前向きに対応するということがあったが、結局話し合いには応じなかった。  
12月25日 今日から2月末まで越冬に入る。1月15日までは、越冬実を支援するというかたちで夜10時から夜間医療パトロールを行なう。越冬実とは、医療センター前の布団敷き、徹夜の警備等を行なう。  
12月29日 30日 大阪市が越冬対策として、南港と自衛館に臨時宿泊所を設置し、入所者の受け付けが始まった。合計約2千人が入所した。

1月1日 3日 第七回越冬セミナーが開かれた。テーマ「医療」特に結核。参加者14名。2日には、横浜のドヤ街寿町の映画「生きる」が上映され、百人以上の人が集まった。  
1月2日 越冬実市催、新春団結もちつき大会（於三角公園）  
1月7日 越冬実が、京都美山町にあるユニチカの下請、八起建設と団交を行った。ユニチカからは今後、八起をつかわないと言話あり。

1月12日 越冬実が、7日に続き、大阪駅で手配していた藤原靖組と団交。  
1月16日 キリスト教越冬委員会が中心となり、深夜1時よりパトロールを行なう。2月末まで継続する。青カン者83名。